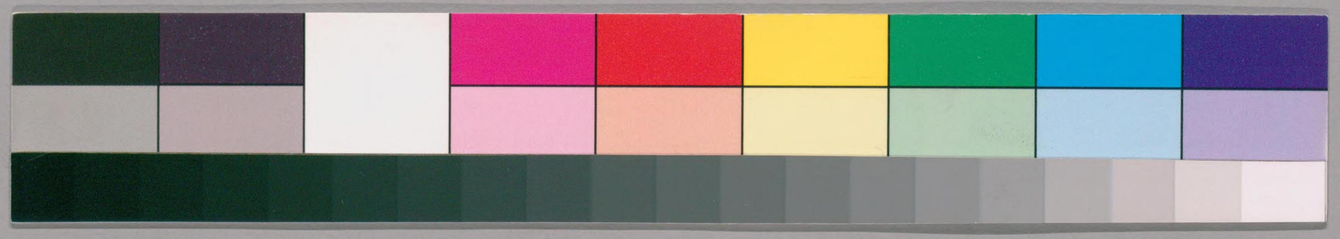
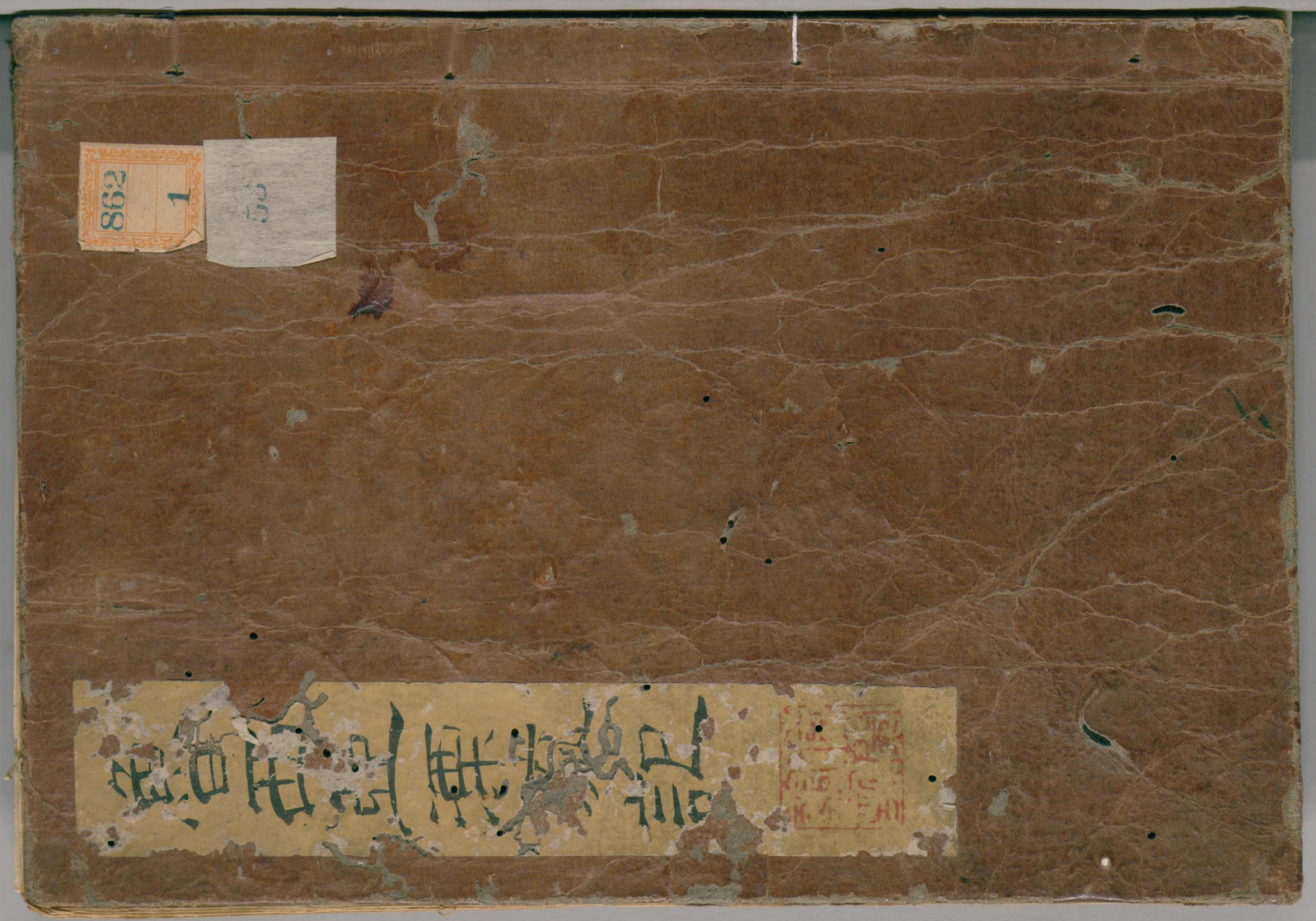




ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1

文化元甲子九月來朝

ヲロシヤ國人眞像圖

尾崎式寫

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』 請求記号 862-1

ガラス使用

ヲロシ國王ノ使節　カアムルヘル　名宦ニコラアレサイット圖像

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1

ガラス使用

阿羅察人圖

使者カームルヘール宦レサノツト名

年四十一

内ニ国王ノ名已名アリ外ハ玉飾ナリ

此物衣裏ニ縫着セリ

浅黄ノキレ

流金

青天鵝絨

銀造玉飾　裏猩々絨

紅毛

金絲

白毛

此帽子頭役ニカキル

金絲

チヨロケンヲリ此類人金滑黒皮ナリ餘人ハ掛ルモノナシ

剣何レモ尤ニアリ

金鳥頭　象牙

金

舩頭及近侍如尤

舩頭クルーセンステ名

黒羽

白毛

此帽子二三人カウムルモノアリ

表猩々緋

裏絨羅紗

白絹

ソリアリ

舩頭及近侍如尤

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1

ガラス使用

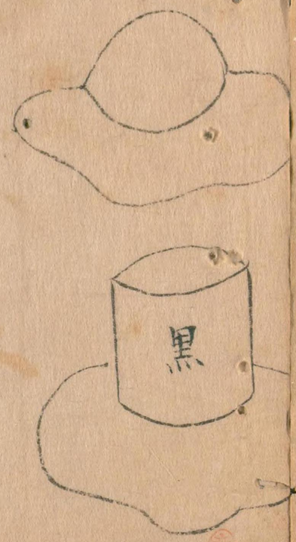
国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』 請求記号 862-1
ガラス使用

裏

如此者ニ人部ヤロニ立テ警衛ス時変リニシテ交代ス一人ハ鉄炮一人ハ鎗ノ也十二三人シナモヘキラシヤナリ

如此者ニ人部屋ノ口ニ立テ警衛ス時カハリニシテ交代ス一人ハ鉄炮一人ハ弟ナリ或二三人皆濃萌黄羅紗ナリ

凡帽子甚大ナリ
上ノ鳥毛一尺二寸許
凡帽子甚大也
太鼓打一人ハ
別ノ服ナリ



舩長百七十七フート但十八間程ナリ石火矢十六挺
鉄炮七十九挺　劍五十八口　弟二十四柄　鹽硝六函
又三十三桶
其外石ト食物ヲテナリ貢物ハ別記セリ
文化元甲子九月上旬入貢

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』 請求記号 862-1

ガラス使用

862-1
(53)

魯西亞國聞書写

九月六日渡来異國ヶ帰朝日本ヶ聞書
一當年ヶ十二年以前寶政又丑歳霜月廿七日
仙臺小鹿郡石埜牧濱ヶ江戸江米積卓ニ
海路同月廿九ヶ極月二ヶ迄同國棚倉沖
ニ而難風ニ垂洋中寸ニ深シ豐寅歳又月十ヶ
頃ヨロシヤ国内寓ニ深着
但シ日本ニ無之共事 何里ヶ中ニ大数月洋中ニ

漂しく故に覚り
若宮丸 二十六反し帆十六人乗所主し内
奥州仙台領西尾郡宮し演
一母兄姉妻在之 義吉衛 四十三才
同家妹郡寒沢村
一妻 悴 在之 津太夫 六十歳
同
一母姉妻 在之 左平 四十弐才
同国西尾郡宮し演
一母弟妻 在之 太十良 廿四才

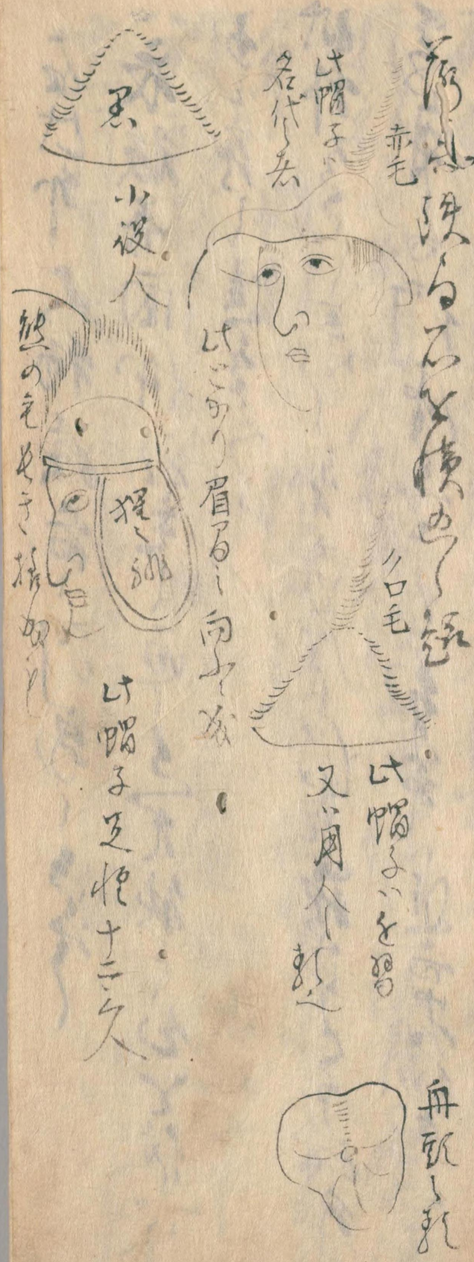
一乗組十六人し内 舟頭平吉衛 常者所主二人
彼地ニ病死 渉十三人し内 九人ハ病年ニ当 行
不叶故同国ニ渉居申候 四人ハ代変日本ニ居 遣
ニ故国主呼出ニ申候
但其ニ寄彼地出帆し候ハ 六月十七日ニ当 蜀
子九月六日ニ相日 長崎 名印人ニ名云 俗并 製同 外
ニ海陸ニ彼国ニ容体也 百日以前ニ 渉月代ニ 猪子
ニ相見ハ申候
一此変ニ口ニヤ国主ニ分日本ニ貢を献し 祥祝願ニ
渉須来り舟ニ商船ニ 在之 也彼国ニ至ニ

名代にして日本に奉行に准ずる役二人用人伴
者二人其外役人に新其外足軽者十二人来る
但し此足軽伴者は途并鉄炮不持して警固役相勤る
付り諸役人に新十二人は帯刀を足軽いたし
一ヨロシヤ国分日本に定法五十千里程と来る里
但し七人共又百ヲ以テ里ヲ定め日本に三里は彼国に三里
に成れ当る
一右国に産物大一切毛新天鵞絨抹織出し以
一居宅に粮子居を仰石に以て高積上文に材木
椿に家とする事大なり板敷きよくあるを並
[illegible]

一米は大なり麦を含む
但米一向に無之にハ[illegible]と云板拂底に酒も麦は定中に酒は
[illegible]
一含事は一日に三度 牛豕鶏焼羊
一[illegible]月に金銭三文宛三人前に国主分賞是
に食物其外に[illegible]を遣し以彼国に酒世事
[illegible]
一[illegible]極し寒に至に冬に季に[illegible]大[illegible]
[illegible]国人寒に[illegible]と[illegible]
国に冬に季は日に[illegible]事[illegible]日本[illegible]時[illegible]

出る九月時に入申候
但本分出る事夫を通に当地上を去事例を取入
一國主衣服帽子称別に変る事なく此節渡海
客仲に令銀し織物称る美麗成事也
一女し様子は貴儀なるく数結事なく何もとも
作り数て其上帯をかかり肩より風呂変に様成
者を是人袴を下と上とかし居候
一彼国を一ケ年十二ケ月に元六七分にて一月経る
又其所二百に経る里月と云事なし
但し四人に居元宮前は海月に様子に十五分数事を知

日をかぞく十二月に当日和に割合る里月何数る様合
相考り当時日本九月上旬比る故に変若干節五六
九月十日なしよし
一此変し船は紅毛舟に成し魔威は如三人白者
物に当亦客仲
舟中に船を廣く作し舟中に献上者を横幅
蔵に洗る石を横也し紙



右氏外人物殊尚々別事々法度
一衣服并面体殊之通て見能々乞を付六
かゝ寄し遠き之
此外ゑゑ彩し事ハ清府ニ於て御事ハ御
多用ニ而行屋ニ而し第事ハ追而御知ゆへ
九月九日
当て法里大名者以下ニ於而御諸侯迄ハ陣屋
相備幕打廻し申し候ニ而事ハ何事も諸用
取廻相候ニ付ニ先又略ニ
一新其兼新地被計事幕打扶紀方其物請
其高膳常分

文化四年五月廿三日南部大膳大夫様ハ
御用書牧師備前守様ニ御届書右通
相前西服其地唐太鴻沖合ニ去月下旬ニ於
異國船ニ被相見合ニ処同所タシタン与申処
於船ニ而異國人数多被上陸何し議義ニ至連
余り彼船乗り従又同所ニ困難ニ而不残
被乱暴ニ上火を掛ニ而二十僅出帆いたし
十一月下旬ニ頃唐太鴻ニ同所ニ沖合ニ飄

通候段注進有之候ニ付　松前若狭守人数
差向申候処同人家来共ハ打取家来ニ手疵候
数被致行方不相知候旨家来共ゟ申越候
依之持場之内ニ而も出張罷居候家来共非常之手当
申付置候人数之内ゟ鉄炮足軽百人不取敢
差越候手寄之海岸江差出置当節被差
行所分中迄ハ以来差出候場所ニ差向置候
此段ハ右追々増人数差出候様手当申付候

所分中ニ来候ハゝ壱領内浦々手当之為人数申付
置候処当方ゟ御沙汰文字紀仕候由来候ニ付此段申上候

五月三日

南部大膳大夫様ゟ武家月番江差出候通
先頃以使者申上候而蝦夷地之内会所異国船相見候
旨之処松前若狭守家来之者共分中ゟ罷越打掛
之内ニ而も出張候家来共非常之手当申付置候
人数之内ゟ鉄炮足軽百人不取敢蝦夷地へ差越

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1
ガラス使用

然ル所ニ寄し海岸ニ罷出候ニ付御奉行所ニ而も
申達ニ次第差出し場所ニ而請取且遣し候人数
差出し候紀ニ付候処 去月十二日御奉行所ニ而
より国元諸家来ニ為物頭弐騎足軽弐百余人
御奉行ニ可差出旨申渡有之ニ付物頭弐騎同付
役之者共小筒組十人先頭物頭鉄炮組足軽
惣百人差出ニ而夜ニ而弓鉄炮ニ而其外鉄炮
外足軽都合弐百五十人鉄炮弐百五十挺ニ而

右之人数ニ而造し城下ゟ罷出候得共先日より当月廿
候処平穏ニ候
去月十二日御用人へ被仰付 御用番青山下野守様江
御届申上候通
当子十二月御奉行松平安芸守殿ゟ日本ゟ諸
家来ニ而召連候ニ付両船兵乗組之者警固
申人数家老之者共差向下申渡候付召取兵
城口差向下申人数御役諸しき為五十人申ニ家老江

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1
ガラス使用

居立ゟ之様ヱトロヲ得ル半人ハ銀分ヲ乗て家宅之
船ニ而居向ヲ中ヲ有右ニ人数ニ而鉄鉈鉋ヲ得ル
計中復ル然ル所右連ニ而箱鍍并ヱトロヲ得ル
交代人数ニ而船或鍍ハ四十ヲ人乗組ニ而鍍ニ十半
ニ人乗ニ而右同月銀分ヲ書嚴ニ湊ヘ出帆ニ而
ニ鍍ハ海上ニ無難ニ登十二月ニ笠鍍ニ忌ニ鍍ニ十半
ニ人乗組沖合ニ而風留リ登七日時ニ至サワカリ難
ニ而被船或悪ニ而鉄鉈諸色ニ而不動海矢乗

組人数ニ内足性三人溺死ニ而鉄鉈ニ諸仕ル所
中鍼ハ右ニ付不速ニ忌出ル海矢ニ代ル或悪
右ニ通

一鉄炮　百挺　一大筒　四挺
一弓　十挺　一纏　一通リ
一長柄　廿筋　一籏　一流ヒ
一幕　六張　一三道具　一通リ
一遠目鏡　一通

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1
ガラス使用

右之外海矢之武器足軽自足取揃代
人数不知数海中付ハ左之通ハ左ハ以座中之右
同四月廿八日津軽戦中守様ハ以座左之通
但四月廿八日ハ申之ハ津軽様ハ以座ハ又月二百
此度様ハ西船表ハ上ケ地之御付ハ付彼地勤人
数若出之候ハ達之ハ左ハ付左之通
一物頭壱人　一使番海役兼壱人　一侍又人

又

一警師壱人　一足軽百人　一籏壱流
一纏　壱通　一弓　武張　一浜地廿挺
一玉箱　廿箱　一幕　又張　一三ツ道具壱通り
惣人数百三十四人
右之外入用武器支之ハ様城下出立ハ付ハ
此度出座中之右
六月朔日御用番様ハ　浜部来ハ候出之ハ
御付之左之通

松前西飛夷ハ日異國和朱着ニ付人数若干
ニ拵ニ作渡ル
一人数五百人　松平政千代
一人数三百人　佐竹右京大夫
一御同附　青山金四郎
一便番　小笠金四郎
　　村上大学
右之飛夷地ニ異国和朱着ニ付彼地ニ為御用

可ニ整ニ当用意可ニ彼当ニ作渡ル
一御徒同附浅野七十五郎　林深四郎　神谷勘九郎
三輪谷平西村右ニ充加賀万助増田賀四郎
一五月三日津軽越中守様御道中ニ御備案ニ
御案勘ニ成ル処名代ニ依ル江案勘ニ活礼ニ為更ニ当
恵ニ国表ニ活賜ニ下ル右飛夷地ニ異国和朱
着ニ付右ニ名代那須之郎
五月晦日

一南部大膳左衛門其國和報館分荒々
津輕沖ニ相見ニ中々多進々注進有之ニ依之
和義先達ニ而ニ御ニ事ニ後病案ニ事ニ以ニ先押
在所出立彼表被荒行ニ候ニ以ニ御法礼ニ事ニ
名代ニ以十上ニ候ニ以ニ達ニ此度ニ付ニ用家古依
大蛟頂戴ニ名代南部主税ニ以ニ法礼ニ上ニ以ニ
候ニ此度十上ニ
六月三日

御若年寄堀田掃津守様右衛門其地ニ其國和
来着ニ付悉見分ニ以ニ用ニ御付ニ金子三千兩ニ
御付ニ申
其國和来悉ニ付左門義方ニ又月晦日出シ
書状写六月十六日大坂表ニ以ニ付
一此度奥筋筋彼荒々和義道ニ才口シヤ国ニ入
大和小和十般斗リ繁迫ニ以ニ付筋彼御奉行様ニ
以ニ終味ニ而ニ如何様怪変大論ニ相成津怪様

南部様・仙臺様・松前様・箱館御奉行様迄之
浦備之為相成候所、オロシヤ船押渡り候節
厳敷御備ニ相成候由ニ而、秋田様ニ而も三百人、庄内様
千五百人之御加勢ニ被仰付ニ付、一番目之船箱館
御奉行様より御飛脚を以被仰付ニ付、酒田川入船之
出帆之浦方人数ニ船数在之ニ付、船数之五百人
不残船ニ而御出張ニ而、浦役人立之上
十艘斗ニ而候之処ニ船数之様ニ被仰出候、依之大船之

浦役人ニ而御触来船ニ差出し出帆見張之為船数
船又秋田川中迄参り御雇入船数
義ニ付、右之船寄等事先ニ而沙汰ニ而難儀御
事ニ有之候、依之大変故当所問屋方分国ニ段
飛脚差出し段々任手紙有之候而文之趣之有之候
　五月晦日
夏ニ関東ニ而松前様御預り松前御雇之
御船分九千石之通船ニ被仰付候而松前様御用

奥州仙臺領石巻湊米田村左兵衛支配ニ而
出在船船頭儀ハ夫ニ相成候異国表ヘ罷越候
ニ付右船頭ニ而乗組候船中乗組之者共海上
難船中ニ而乗組候人数ハ船頭ニ而荷遅之次第
可申上候
六月朔日
右同所ゟ書状之写六月十一日ニ大坂ニ着
此度難船共ハ地エトロヲ島ニ而異國船ニ而相見へ

隨而右之段ニ付被仰渡候而御役所ゟ秋田郷十三湊
御船方ニ而乗組中ニ付丁度同日出帆止ニ仰付候処右船被
御用ニ付借用船又ハ被相渡候船之高船賃右ニ付
蔵實出帆者ゟ右之筈相之上御勘定[illegible]可
被下候米高相場現金ニ而拾文安値
御船御用船
一 千石
一
俵屋久右衛門
船頭 安兵衛
大坂
[illegible]屋吉兵衛

一

右之船異国江漂着之
仕候ニ付為見届差遣
候間
御心得可被
仰渡候
以上
六月十七日

大月幽斎
御用番

先頃
御届申上候異国船
漂着之儀ニ付
御領国浜辺
御警固
御人数
御差出
御座候哉
御届
御座候様
仕度奉存候
以上

来ル廿日
御発駕
御座候ニ付
右
御警固
御人数
御差出
御座候哉
御届
御座候様
仕度奉存候
以上

来ル廿日
御発駕
御座候ニ付
右
御警固
御人数
御差出
御座候哉
御届
御座候様
仕度奉存候
以上

六月廿日

南部大膳大夫
家来

来ル廿日
御発駕
御座候ニ付
右
御警固
御人数
御差出
御座候哉
御届
御座候様
仕度奉存候
以上

六月廿日

毛利甲斐守
家来

来ル廿日
御発駕
御座候ニ付
右
御警固
御人数
御差出
御座候哉
御届
御座候様
仕度奉存候
以上

六月廿日

南部大膳大夫
家来

来ル廿日
御発駕
御座候ニ付
右
御警固
御人数
御差出
御座候哉
御届
御座候様
仕度奉存候
以上

六月廿日

毛利甲斐守
家来

来ル廿日
御発駕
御座候ニ付
右
御警固
御人数
御差出
御座候哉
御届
御座候様
仕度奉存候
以上

六月廿日

南部大膳大夫
家来

来ル廿日
御発駕
御座候ニ付
右
御警固
御人数
御差出
御座候哉
御届
御座候様
仕度奉存候
以上

六月廿日

毛利甲斐守
家来

来ル廿日
御発駕
御座候ニ付
右
御警固
御人数
御差出
御座候哉
御届
御座候様
仕度奉存候
以上

六月廿日

南部大膳大夫
家来

来ル廿日
御発駕
御座候ニ付
右
御警固
御人数
御差出
御座候哉
御届
御座候様
仕度奉存候
以上

六月廿日

毛利甲斐守
家来

来ル廿日
御発駕
御座候ニ付
右
御警固
御人数
御差出
御座候哉
御届
御座候様
仕度奉存候
以上

六月廿日

南部大膳大夫
家来

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』 請求記号 862-1

ガラス使用

ニ付番所付添ニ而南国人数等ニ至迄相究候
ニ而相渡武器目付役之者鉄炮弐挺ニ而小
頭取し候参漂流人へ向ふ而支配役差添ニ而
罷越壱番所ニ而見え候ニ付取しも同所ニ有之候ニ付鉄炮乍受
城下へ鉄炮物頭之者目付役之者共火業師弐人
歩行武者三十人足軽九十人其外之者迄ニ而城下
出帆候ニ付後右衛門并間々東方ニ而帆を張
相見へ候処同方角ニ前日ニ而強風之沖相通同

国之前未河沖ニ相見へ候旨伊豆前御城異国船東方
海上并海ニ而右は東向ニ相越候ニ付仙台領

文化四卯月　　南部大膳大夫

去ル廿八日クナシリ島沖ニ而右同所之者共〆粕村
久野向井新勘助並合ニ而式蝦夷地之府内
より異国船武役漂来リクシュンコタン場所え
通辞之鉄炮打掛攻入七人鉄炮弐人武百五十人
往生相為書屋并番所焼払蝦夷地之番府

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1

ガラス使用

去月廿四日管轄之所攝出安羅等十八家
之支配韃靼狸極之御出張、逆者之次第大乱
蜂起地及乱ニ付三人殺又五百人程殺被
番口可申出ニ付望ハ合名大ニ人殺ハ致未方
也、依御出張ゟ来り右ニ付御用之極く
出張之由也
依之極口ニ御付ノ清書附ケ御止在候
一夜之強動之儀之処過ニ候ニ付上候

津軽極之勝之辞領ニ寄り候ニ南部極出方
御出張ニ付、津軽極之相成候七人打死足軽
弐百人餘程打死致し外ニ義ニ而餘程討死
之者有之趣承知仕候村上之手勢津軽極御
最中之由、先達而嫌疑ニ付大ニ親類之者
頃ニ而被出候へ同役討死ニ付早々御付仕候
付仕候弐拾人余之拾別御覧ニ而御座候
討死者覚悟之被勝負之趣承知仕候御座候

大変之義ニ付御吟味

松前若狭守殿城下江蝦夷人数ヲロシヤ手當として

城下江被差向先　酒井左衛門尉様　出羽大名

南部大膳大夫様　御用

後　丹羽加賀守様

伊達陸奥守様

城下江者一件之義松前殿へ被仰渡南

部津軽様へ被仰渡有之候御役被申渡候

城下以下領分貢付有之候松前殿一円御取上ヶ被成一家

若狭守殿御同様江戸表之様子を

如く之儀有之候佐竹様松平越中守様御取

国江大名之義ニ而御寄合之内高村英雄

之名あるを以十五日御評定二十八日若年寄

大小之常之衆ニ而上ニ而御参之上右之人

沢人之事を持せ候義御役之御前

が表御参集之上出座而御用之義有之自分海

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』 請求記号 862-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』 請求記号 862-1

ガラス使用

魯西亞國漂流記

尾崎氏

維時文化四年丁卯九月寫之

魯西亞人御奉行ゟ茂出ル行列

文化二年丑三月六日

町役人 同

肥前足軽五人 同

召シヤ使 兼物

第役

羽織袴股立 挙ニ着板股ノ棒奉

船番十人 肥前足軽五人

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1

ガラス使用

恭敬而

大日本国王の殿下にヲロシヤ国王より呈進せる書に載る所
貴国も代々我々先代々の盛業を護る祝賀仕候我祖国
を始しより国王たるところを第一として女王なりし所より第二
これ迄三代に至る迄家業を継承し其末に蘭陀国フランス国アニ
ケレス国イタリヤ国イスパニヤ国ドイツ国其外国々と戦争発向といへ
ども家国は平和に成国々相極め諸邦より義を顕し欧羅巴
の諸州迄平和に及び候然るに　貴国之御事本邦より懸隔也
といへども属国の地方迄遠に是之義を通し御当地に浮き
白洋之御事指別に信義を結び御度祈自に至り存候自昔年
貴国御仁徳之御事女王なりし所御意に承知候事承りに候而茂
先年　貴国之船難風に逢ひ家国に漂流仕候に付其人々
貴国は全帰朝のため十二年以前自国の船を仕立し連渡其節
役方之者共指分御厚情に候而　候付其之我国之船再び
貴国に来渡においては生涯之津迄至るへく信牌を下し給
感謝奉存候之仕合に御座候右礼謝として今般使節を以
江府へ礼為仕候　貴国之高徳に傾服し猶又貿易之道を
開き度心願之候　大日本国王　殿下に礼謝を相頼み候
付き其方柄を操之我心服之臣がかもり居ふる 官名エコラにて
[illegible]

國綱帝王之法令ニ而右禮節ニ準シ今般使節を以
江府江禮為仕候ニ付　貴國之高位ニ傾服シ備交易之道を
開キ度心願ニ依而　日本國王　殿下ニ禮節を相願候ニ付
然ル者其力柄を操ニ我心願之所かなわぬも忍ふる　名官ヲ以テらハヌ
且又其のことゝ申者今度流ニ参り　貴國之御法ニ不知
界内ニ付ヽ何卒　御國法とも御示之願ひ度奉存候
一 先年難船ニ而亜家来ヲ漂流せし　貴國之人ヲ撫育仕遣
世話遣候ニ
一 積年　御當國を慕ひ候義を候度兼而念願ニ奉存此書を
呈し向後御用筋承度奉存候前件之次第宜敷ニ付　随而
御願之通交易相遂ニおいては我属國之内カテヤツク小アメリカの内ニあり
アレウテキユス カムシカテカ小アメリカの島ニ有 シユミレス カムシカテツカの辺ニ有 是等之島々ニ而渡らせ
船数之儀者一艘ニ限り其船御定置之法度ニ任せ長崎之津之外之地ニも
御指揮次第渡来為仕度候ニ付若又向後　貴國之人我國内
何國之浦ゝ漂流ニ至る事にも乍恐若又今入津致候様
差而津之浦ニおいて命を下し候ニ付而人之　御當國何国之津ニ
運送一回ハ将又當法ニ付而老人を敬之趣則使節之者ニ而
あさ其之のことゝ而其之申含在候　貴國高官之御方之御
之次第も御座候ハヽ右使節之者ニ而御沙汰被成下度奉存候

進貢

一 時斗仕込象眼り物
一 大鏡　一 臘虎皮
一 象牙細工物
一 鉄炮大小色々

右之趣の川とを具ニ申合座候。貴国高官之御方ニ而
之次第を御座候ニ付右使節之者ニ御沙汰被成下度奉存候

献貢

一　時斗仕込象彫り物

一　大鏡　一　臘虎皮

一　象牙細工物

一　鉄砲大小色々

右者微細之品ニ御座候得共自国之産物ニ而御座候上候御照
納被下候ニおゐては難有仕合奉存候。其外国産之奇品等
猶て備　上覧奉存候

王府ペートルベルクユおひて即位してより三年十二月二十日

ヲロシヤ国王
あれきさむとる判
国老
おゐむ又殿

右者ヲロシヤ国王ゟ捧候書翰之主意書節書翻訳仕候
使節之役之者の川と申口承候趣和解仕差上申候

子
九月十日

阿蘭陀
大通詞
〃
小通詞

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1

ガラス使用

ヲロシヤ船風説書

今日御当地神の浦江碇を入候ヲロシヤ船国王之使節之役人
レサノツト船頭クルウセンステル申出候趣左ニ申上候

一 ヲロシヤ船一艘暦数一千八百三年八月十一日（享和三亥年六月廿四日）同所出帆仕候
テーマルク之内ユツペ（こハーカ カナリヤ）諸島南アメリカ州之内フヲニ
リヤ国支配之海江罷入暦数一千八百四年九月三日当七月廿九日
カムシカツカ江罷越同九月十日当八月七日同所出帆仕今日迄三拾一日経
海上無別条着岸仕候右一艘外御当地渡来之船無御座候

一 今般使節之役人渡来仕候儀者ヲロシヤ国王より江府江之呈書并
御奉行所より者右写書持参仕候ニ付右船沖出役御検（出役）
使江差出候様申候処本書者江府表江使節之者持参呈
上仕写書者御奉行所江差上置申上候様国王より命意ニ付
何分他之御方江者附属難仕候旨申上候依而右呈書之大意
相尋候処先年於蝦夷地信牌を賜候御禮申上候ため今般
使節捧献物并其御禮相勤候并御当国江自国之信義
を結ひ且交易之儀も御頼之節御座候

一 本国乗組人数八拾六人之内ヲロシヤ人八拾二人日本人四人外ニ乗組
無御座右日本人之儀者拾弐年以前ヲロシヤ国江漂流仕候ニ付
当節連渡申候右之旨ヲロシヤ船頭長者共申出候
むらさん
ゑんてゝ立祀ご婦

右之趣カヒタン承り申出候ニ付和解仕候

子
九月六日注進 同七日神ノ浦碇を入
大小通詞

に到る地なる故に議する事もなく有へしとて長崎
に到るための信牌を与へしなり然るを交易の
事を携来る事 抑我國において申諭するを無へからき
事やいはんや是偏域を異にし風土等異なる事を悉く
洲交改て命諭する事件のことし 特に船中薪水の料
を行ふ然る上ハ我國に望をたち浦と掃と返る船
繫（カリ）本度ハ速に帰帆すへし

御奉書

我國むかしより海外に通問する諸國少なからすと云
へとも事便宜に非さる故に嚴禁を設て我國の賈
舶も又たやすく我國に来る事を許さす強て来る海
舶ありといへとも固く退けて入れす 只唐土朝鮮琉球
紅毛の往来する事ハ互市の利を謀るにあらす
来る事の久しき素より其いはれあるを以てなり
其國の如きハ昔よりいまたかつて信を通せし事なし

はかるまゝに前年家國際船と人いさなひて来
なるあり好を通し交易を開かんとを計る既に
其事再々乃んて深く家国に望む所まゝ切なる
をもとまゝ然りといへども望たる所乃通信通商
のことは至しおゝに議すへかれ家國海外乃
諸國と通同せまる事既に久し滞領を外国に
修むる事をもとまゝにはかす其風土異にして事
情におけるも又懽心を結ぶに足らんいなきにて

行李を解ひまんなをなして縄て遮をれ是家国歴世
封疆(ホウキヤウ)を守るの常法なりいかて其国一儀の教を以て
朝廷歴世の法を変ひ乃んや禮ハ法来を尚(タウト)ふ今
其国の積物を請て答へすんハ積を志るまゝ国と
形しん答んとまれは海外の美里ハ何を乃国の
志ける後かくまゝん答(うけ)まゝるの積れるに志れ互事の
如きに其国の有所を以て家なるを所にかゝ
其利有り似ありといへども再して其を論ずれハ

海外世價の物を得て家国者用の貨とし
あらず業する國計の苦なる物にいたす
やまと柳澤の民奸猾の商物を競ひ價を爭ひ
たゞ利にのみを謀りて良をすれば風を壞り俗を惰
我民を学ばしめ書者之源くとくする所なり互市
交易事なりて唯信を通し隣に好を結び遠
又家国の禁絶ゆるかせにあらずして度を以て通ずる事
をせば朝廷の意如くのことし再び來ルことを費す

事なれ異國に漂流仕候漂奥者四人口上書

松平政千代領分
奥州二郡塚郡寒風沢浜

禪宗　左平　丑四十二歳
同所
禪宗　津太郎　丑六十一歳

同國桃生郡源谷室演

禪宗　俄平　丑四十四才

同訴

禪宗　太重　丑二十五才

私共俄夷國江漂着仕候處去子九月魯西亞船ゟ
送り來り候ニ付踏繪ニ仰付國元出船積荷物和
并際居し候事彼國逗留中し始末有御ニ可申上旨
請吟味ニ付此段左ニ通

一私共義十三ヶ年以前丑十一月奥州牡鹿郡石巻
沖船頭平藏ゟ之雇船平政子代用木薪木小
買木四百本并賣米千百石程江戸表ニ相廻ニ
積り石巻米澤屋雲ニ惣船八百石積若宮丸

六

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1
ガラス使用

江積請沖船頭平參請楫取同玉宮城郡室風沢
左右夫水主同所銀三席民之亜同郡石濱屋
石之巻清蔵初三席菅六席市又良同郡小
竹演蔵次平吉席次煩（カキ）石之巻已之亜私共四人
都合十六人乗組碇七頭橋綱又席市皮綱三席
苧綱武府横辺仙臺御役人分之送り状等無
所請取之同月廿七日石之巻湊出船仕同国東名
之中所波沙漿同廿九日同所出船凡五十里程沖

迄走り以前申酉之風順宜之夜々沖中々波打込
進々櫓蔵打越以程之蔵波々相成同十二月朔日
楫を取順桁船急く相成以付乗組之者とも
驚を拂ひ神佛に掛祈誓身命限り相働以其
地方一向相見ず同風順漸以付同三日帆桂
を伐捨四日五日次ゟ覚米凡半分程進々は
祐稔相凌ぎ後ゟ浮（ナギ）ゟ有之以前深蔵
内塁寅正月六七日次又大浪々北揺立以前秋

之内凡半分程粉又刎捨表し方縦二度為引
淦水を深打後は色々而方角義能不相分
は付流れ候事ニ致し其上ニ而同十二日穏を以打
破通とし白ハ二十ヶ以前打破同日上掛ヒ裂ハ付縦代
以引締捨を掛帆を解巻肌ニ打込ハ揖し方轆轤
座行撞ヒ波ニ入れハ付無組し者ニ小ニ表ニ方ニ
居中ハ変二月五日表し方義打破ハ揖し表
垣廻迄波ニ入れハ日粮米二百俵程ニ致し至て外

八

はも通ニ捨漂ニ内三月朔日表ニ下り縦二度破
二段又尺板ニ波ニ入れ支分ハ事ニ風和ニ付ハ同
三日海上ニ蝦ガラ付ハ九木一本流事ハ付堆方
迄事ハ成し方を以里数を札ニ出神籤を上ハ
取堆方千九百里ニ中神籤下りて年ヒ能ハ
日同六日表ニ帆棟を中ニ車立ニ結付桿ニ致し
帆を少し無縦を引せ任風ニ走り或ハ漂ニ在
三月四月中ヒ同様ニ致し吞水ハ為後りニ帰

天水を九海至濁ヲ凌ル角又月六日長巳風ニ
走リ地方ニ無寄中夜又ハ神竈を上ル所
地方弐百里ニ中神竈下リ夫ニ同ニ神竈上ニ如
近ニ地方近ク相成八日ニハ又十里ニ中神竈下リ
翌九日四ツ時ニ東北ニ方ニ高横ハ高山を見ル
同十日ハ一里程ニ相見ヘル高無船ニ無一流
相続ニ其本船ニハ難無付ル高端船を卸粮米
三俵ニ手ヲ廻リニ取積移如舟ハ岩ヲ無粮

九

至船魂ニ持十六人其端船ヲ上リ所日本ニ地ニ
不相見砂地ニ人家ニ無之ニ付異國ニ也ニ四日ニ
存ル場ニ可相尋人ニ不居合ハ付致可ニ右ニ
十日程ニ在人家者無ニ成又ニ神竈上ニ所又十
里者之類神竈下リハ付相又端船ニ無地方ニ
流奥ニ有之無条ニ同六月四日懐相見ヘハ付
人家ニ相尋ニ其前ニ同尚ニ致ニ無ハ鳥ニ
毛ニ付ニ皮ニ積如ニ相見ヘ用致ニ見別也人

三人出来る全具也は漂流也有所行乱詞を書付
頻ニ拒ニ候一向通し事ヲ怖愛存ニ候ヲ事
以変進く右同様ニ若者ニ於人斗出来相拒候ニ付
無是無能ニ者ニ右船漂口ニ到ル様致仕候彼者
打寄引上中ニ幾長く有之髪面色者小黒く
蝦夷人ニ様ニ相見ヘ男女者ニ至ル者ニ有之
其分ニ并鱈ニ似タ如ニ似タ奥杯持来ニ付
貰請私者ニ対シテ業シテ給中ニ此荷ヲロシヤ國乃

属國ニ付テヲニデレヘツケ。ヲーストヤ漂ニ申テ漂テ
取リ中ニ付ヲロシヤヘトモ為ヲ知テヲニデレヘツケハ訴乃名也
ヲーストロハ漂ニ申事也
然ル所ニ船頭平ニ郎俄船中ニ腫氣ニ於ニ臨ニ落重
同八日同所ニ於果中ニ付私者砂地ヲ堀葬リ右
ニ所ニ於同様十日経ニ覚ニ死ニ生ニ者ニ上ニ至ニ
数月時張経ニ於月日ニ腹ニ覚ニ事具通ヘ
漂流ニ後ニ犠牲ニ俄ニ付私者右横ヲ以中ニ上ニ

義ニ出ル候ニ絶ル前同月十三日ニ覚和尚ヲ御連
乗ニ様子ニテ仰候中第一尚一向通し子ヲ皆通
ヨロシヤ人ニ重頂分華ニ名物ヲ冠筒袖ニ手ヲ
通し華ニテ張ニ船ニ乗ル越ル年二本持乗和
尚ニ二本様ニ乗ル様ニ船ニテ乗ル候仕形
和尚ニ様子ニ付ル様ニ乗ル様ニ答ニ而合点ニ
于ニ節同本人ニ申ル義和尚ニ様子ニ和尚ニ右ヨロシヤ人
和尚ニ乗ル様ニ端船ヲ渡人ニ卸ル様ニ乗ル様

仕形致し右ニ者ニ義一同乗組ヨロシヤ人ニ信居ニ而
連乗ニ様子致仕形右端船ニ帆ヲ立テ走リ出
同様ニ出ル時ヨロシヤ國ニ出ル様ニ有之ニ而
若致し此所ニテハ三四百横位ニヨロシヤ船ニ乗リ居
三十人乗乗組陸ニ三十人乗ル在三年同ニ交
代致し出ル右船ニ船ニ日本同ニ和尚ニ和尚
同所ニ壱ケ年程逗留致し皆言ニ船ニ日ニ焚物
和尚ニ流木ヲ捨ル小出ニ入ル冬ハ日本ニハ余程

寒之年強身足と思ひ往ける御宇相成ける付
家内に事ニ見詰し食物ハ穀物無之ニ付日々雑
鱈鰯等ニ魚類斗給ひ其所ニ而相持逗留中
魚類斗給ひてハよろしく御ある数ハ付此節ハ武
年同交代詰し和へ連越ハ船ニ乗ニ往船中
少年ニ是物一ツ渡し十又人ニ是ニ付黄史太郎ニ乗
組翌卯四月二日ニ覚同所相同廿七日サニ。
八右ニ中鴻ハ是ハ前ニ鴻より此所迄船流千里

の里所りもの
皮船ニ依海獣ニ皮馬程のものニ乗和なる
獣ニ乗し船中ニ波ニ又たゆ小ニ事里数
の儀ハシロシヤ国の一里ハ同和ニ三分一ニ成ニ是ニ
サニ。八ヶ世所ニ至シロシヤ人四十人余所在同所ニ乗
有之ハ獵狐の皮ハ多し皮影等ニ後迄二日程逗留い
ハし出船仕アニセイツカ中鴻ハ是ハ此所ニ至
流千二百里同所ニ至二日程逗留ハ此嘗先年伴

然ル幸太夫漂着せし処也猟虎沢山也同五月
十四日此所出船ヲシテレツカニ着夫ゟヲホウツクと申所ニ
同六月廿八日着此湊凡五百石積位之船又六艘も
繋有之ヲロシヤ国ゟ仕送り物積候役所并人家二
百軒余も有之船并右役所へ引渡し銘々食事ハ
公ゟ為給表口二間余八九間程有之所役人御定宿
相見板敷ニ腰掛を用ゆ家ハ十人前ニ居用申候
西洋木作りにて二階三階之家造りにて結構也

何也も至極ニ相見へ申候此所カムシカツトの内
而くヲロシヤ国ノ入口也同八月廿八日役人衆私共連
越申ニ付此所出船仕候役人二人付添
船ニ乗リ二百里余も出立而彼ヤコウツカと申所迄之処
道中人家無之ニ付所々ニ而野宿致シ申候
而も馬ニ喰も草ヲ持参りて通申候鞁ニ付ヲロ
シヤ人先ニ参ヤコウツカ迄付人ニ足弁参り私
共も出立仕同十月十二日ヤコウツカニ着此所ハ家数

凡二千軒程も有之、町方ハ前ニ木ニて組建候家
是有無宿主ヘ日々飯料并酒給り役人
市又廻り医師ヲ付け病気之者療治
並之医薬を用香或ハ赤キ草の実様之物
御給ニ上日々ニ病人少宛く連来り候付
私共も不残出ル所病人二三千人も手取を看之
同十一月廿日右役人相見え此所出立致し候様
依之者共出立仕候村名不存宿屋輔之家有

若仕度而又ハ其節ニ罷付十月廿六日 相果申候
龍掛御手当并病気ニ相成り其外之者ハ山猫之皮之夜具
是ヲ被仕来し置付此国之病ニ而相果申候
悲ニ鍋雪車ニ積来物ニして差添付在根差添ヲ
右者共ニ弐人宛をいつ馬之足成ハ三疋ニ而積出立道
中川なとハ氷通り或ハ河ニ氷のはり上をとるらしく
渡りハ一河ニて凡日中ハ其外にも無く又相見
中ノ河ニても広サ一町ハ限り相分りニ申 北ニ而十里

三十里或ハ五十里百里し処へ小村幾場有之塾
辰正月五四日エリカツカ今申訴之者洪雲文ヨリシロシヤ
自ら代史来居蔵木ニて組建ハ板菅之家又ハ石ニて
是ニて家ニ三千軒稼者之洪雨之二千五百里今申
中稼者之日分十文之当りハ銅銭壱文ツヽ代史か
銭之へ日々ニ与ハ付役人体之者世話致し凡五六百
位之家を備史一ヶ年銅銭二貫五百文稼之家
貸ハ拂之処遣之諸人之言ニ拂ハ右ノ手当テ斗

高ニ足り合ニ申ニ付石土市を指運ハ月産稼致
ハ一月五十文又ハ成文位之貸銭を貫能御ハ者ハ
百文を貫ハ御之ニ洪雨之来りハ道中前無之
事強雪積り貧窮ニて無援面何トシテ往来仕ニ者
ハ腐(フラン)深(タヤ)ハ下後ニみ之ニ拂ニ拂ニ拂ハ月雨ニ
凡八ヶ年程逗留致し月吉所ニ成傷無之を拂
ハ付代史自逗河を出ハ愛国拂ニて有業相
与ハ遣ニて貴業其外地数業者無産然而

追ニ落ヲ来リ来二月廿八日相果ルニ付葬ニ付家ニ有相ニ
彼國ニ宗旨ニ無之者ハ寺ニ落ヲ来ハ不相成ルニ付
私共ニ葬リニ役中代官ヲ長キ棺ヲ棒ニ其
骸ヲ伴向ニ入ル事ニ打付ヲ口ニヤ人墓所ニ
服ヘ持来リ葬ニ後石屋ヲ道具ヲ備リ鑿
細工ニ奥州小竹濱河部屋吉郎次第十年ニ有
石ニ那付葬ルニ建屋中ニ然ル所亥二月初旬
近日迄所出立為ニ波ヲ口ニヤ国都ヘ連来ルよし

代官ヲ申渡者之先ヲ都迄凡七千里程ニ申
出同人ヲ雜物ニ着物股引当木 私共十三人
江呉同月七日役人落添前書同様ニ車ニ乗リ
出立波ニ繼場ニ一日ニ繼留ニ夜ニ我食
事ニ○飯ヲ車の上ニ為給二便ニ外下リ仙義
夫無日落ニ同所出立ニ翌日ヲ左右夫清落
病年ニ付落添ニ者ヘ相郎迄而使年次第
落遣り様病ヘ落疾殘十三人出立日ニ道

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1

ガラス使用

交易ニ年ヲ以テ同所出立シロシヤ嶋都 モスコウ ビヤ少ク
ト称ス若是ヨリ近ノ四二三百里ガ之ヲ道中小村
有洪変都会ニ達シ國王ニ視新住居ハ之ニ
至ル人入也繁花ニ達ス見ル事ハ是ヨリシロシヤ
國都ビゼリホルカ迄七百里ニ当ル左右撰ス無木有ク
道ハ野面ニ於テ石ヲ敷ナシ平面ニ日ニ人出ル遠
詩ニ稚子モスコウドヤニテ一日逗留ハ事ニ右エリ
ヨウツカ也立ニ日分凡四十八九日経強同四十五日

覚十人ニ於テ ヒセリホルカ以前詩ニ左右史清蔵
詩ニ於テ若出ニ遍病氣ニ付途中ニ居ル其後以
ニ於テ相成ニ出ル無ニ不法ニ然ル所ニ代数ニ
相応ニ稚子相見ル日形ニ代数ニ事ニ至
近日國王ニ出ル事ハ是ニ於テ
是ニ稚國王ニ付有之中ニ十人ニ着
日本仕立ニ孺子ニ是物相識帯ニ于ニ
代数ニ於テ是ニ付貴史ニ月又月十又日

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1

ガラス使用

通詞し義之先年俗国之波漂流者ハ丑年相
前ニ送来ル生国雖別白子村幸夫之所
漂流時ハ同所新舞と申出し里当時ハ召シヤ
国役人ニ相成ニコライバイトルイテ与改名改し彼国
之女を妻ニいたし子供有之里日本ニ横子
をもハ相尋ハ付相懇ニ相答ニ于後和尚右
者寛ニ析ニ死越ハ是ハ処之四当日程し家
妻子者又人相言百仕者とてハ無之右使

節方江国主分中付有之ハ中之ニ和尚滞ニ
中相見ニ并孺伴真邦会拝横成雨日未稽ニ
ニ付黄更吏分代変処ニ乗り同所ニ波遠ニ
内ニ国主より雑走し里ニ食物ハパン家兼乾
酒等迄一日ニ数度ニ相来凡一ケ月里程ニ生周
車ニ乗り役人附添所ニ見物出事ニ其者ニ
容易ニ出し有ハ其後洪愛分廿八里程有之ハ前
ニ国主ニ別業有之国主より為雑走ハ右家業ニ

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』 請求記号 862-1

ガラス使用

一國都平面ニ至テ世界ニ無之所家屋作
りし所ハ石ニ無之上ニ仕れ其洞穴ニ如ク板を作て
天井ニ仕テ上ニ屋ニ如きにて古ニ多代新しき而
ハ材木を無之上右同様ニ家造りニ相見ヘ所ニ
又六月ニ見交申候

一商賣才し義人ハ鳥周類聖業雜穀端とのまゝ
外種々ニ商人一所ニ一家ニ外ニ交ヘ候職人
ハ一所ニ外職を交ヘす同職もかり役人向ニ

御人所ニ交り住居申候

一國産ニ義ハ日本ニ不相変種々ニ有之候内
竹米其之様子ニ麦を含用ニ仕候梅様花
見申度ハ其ハ御様ニ御禁ハ少ニ有之候例ニ
百里ニ得ニ花候申候其ニ有之ニ様或ハ菓花
花候ニ申候

一宗門ニ義ハ絵ニ有板様ニ拘ニ行ク画ハ有之
酸ニ有見交ニ申ニ其ニ七ケ寺ニ有之ニ外所ニ

僧願り之者死去有之節ハ長キ棹ニ仰向ケ
入棺いたし釘ニ而打付寺ゟ僧抔を招き僧抔
ハ数珠を手ニ懸ケ廣キ袖の服を着用いたし葬儀ニ
拇横文字ニ而書キ候を読経いたし相勤メ其後
ニ而葬り申候寺数百四拾四ケ寺有之候由外ニ
神佛をおかり候義ハ見受不申候
一 祝日之事正月又節句抔と申候事無之毎月八日
休日ニ商人諸職人ニ至ル迄朝ゟ家業を休み申候

然作り料理を拵へ酒宴を催し十才来申候
目出度くニ山野ニ楽ミ浮世を渡り候由年寄
致し候者家業ニ飽き候ハ旅ニ出候
一 通寶ト申ハ金銀銅銭を通用仕候
一 病人ト申ハ有之候ハ医者人と国内ゟ参候
寄ニ参り然ル処相勤薬調合いたし王城より
直ニ参り療治仕候事其役人御座候諸人用
国王ゟ出ニ相成其国ゟ相成申候

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』　請求記号 862-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』 請求記号 862-1

ガラス使用

おゐて能深く挨拶とふ波おゐて別れ和たい
小船無り本船繋り居ルカナシタとも処へ
来たり本船無く無組居る而国王より使節を
以て秩時斗さしつゝ兼て金銭たいゝ深く
こゝ与ゝ而使節ことゝ大勢無ふ也同伝出来波
コウヘイガハニとも而へ兼アンケリヤとも溪ゝ汐繋り
波しこと而へ使節上陸波し七日後再生船へ
晦りしカナリヤとも而漁鴻ノ人ゟ合日和ゝ

挨拶おゐて世所し向ハイスハンヤのよし又少し
隔てゝホルトカルと云所有世洋中にて大鮫鯨ゝ
影を見る船中船ゝ渇し三日ゟ滞船それより里
出帆波世洋中賊船有之とまゐんこゝ無事
を別に世洋中雖風ゝ以て帆桿を排惜
来し寸ゟ走り南アメリカ州の内アカテリナと
云湊ゝ着ホルトカルの支配なる雲人物高いろ
思く大熱國ゟもく男女とも裸なり男はまへてれ

の様なる物を縫にまとひ如い筒袖に様なる物
を着し洪國日輪を小さす見る一ケ月余り
滞船して帆柱を買船く破損を修理後
家堅牛鶏ホヽ合物代調へ子正月初覺出帆
是より未申しすを指し走り夫分酉のすを指
走り極熱に処を通り又午しすをまし走りせれ
洋中に到て寒く強く所へ行えたり山と見へし大
洋中四月初旬頃又々水をきましマルケリサと云

嵩平着船を汲んとせしに嶋人出来る是を
見るに廿七八人餘りあして想身入墨有面を
怖しく裸なり如も同様なりて如此の業成
[illegible]ひ家居なく穴を掘上に木を立ち
[illegible]ひいて住居の体洪前あて日輪を上に
見る大熱國或ハ海中に入住するとあり洪
嵩むすは人を殺し合中堂今ハ死人何ハ
合ふ中堂ハシロシヤ人語りゆれ神ハ大々忘れ

其渇所致し為能太和を汲に鉄地鍮来候
用意し十人平上陸いたし所を汲海り然るに
諸人共髑髏（サレカウベ）を持来り果物と之也さる仕形
彼は持ち之屋きに物にあらはれ二百程汐の所
屋根玉なし鉄地を解ち吏分出候何国共なく
走り私共有丈角とかりふ申海上二千里程走り
以来四月の来也と云へしきは此サンヘーツケと云ふ
若洪鳥と熱国なく男女共洪穀なる物也

此（フントシ）しい禅の様なるにあてやはり家の数沢山に有之
ヨロシヤ人共雅称とうへんとせしに家一定雅称一度也
其書と彼の交易致すとも此所に七百程滞留
彼も此所す洪辺よりハ日輪を南にゐる七月乃
来り有りヨロシヤノ属国カムシカツテニ若船裏有
又百程屋にて代安の居所有之是に志せ
此人ヨロシヤ国為結合とも思ひ人此所へ来一ケ月
余り滞留して八月又百出候来の事を指同

本の種を悉く走りせるに姫夫松田と堀丹に
をよりて夫々年来の事に走り又申の事も限り
て走り同月廿八日の頃瑞雄と仲にて者や又と
雛風に行ひたる波打込基経を以て鳴山を向
見えて何事なく弁へまりしに二百経程て漸小山を
見出し其ハ沖を乗屋ハ山まるを此と無り船損しせれ
此も帆程無恙して九月初旬日本の地方長
崎上し為に着仕候

右し通り上に所彼国常毎中切支丹宗門し
鈍りて至て義に無之と成若右体し様子有之て
有体ニ本上者清終味ハ
此頃私共義彼国切支丹宗門未鈍通
義無之右体し様子及見候ハ前備ハ
可ごとく心付義無仕候無之候ハ若隠望ハ而
相聞ニて如何様しき陳ハ可ニ御付候
一私共義武異様無事ニ成此金銀所持致しや

彼国通用仕候商売ケ間敷義ハ少茂致候ハヽ急度
御咎可有之候

然上ハ我等共乗組船ニ積有之荷物
不残船頭并乗組之者共ヘ為取捌所持為致
候得共難船之節右之品海中ニ捨候とも又
之者又船中ニ有之候品又ハ持参いたし候
相成候義金銀并諸品所持仕候而右拾品を商
売ケ間敷義致候ハヽ可為曲事候

且又衣類切等ニ至迄所持致候ハヽ急度御咎可
有之候

然ル上ハ我等衣類切等ニ至迄不残相渡し候浦賀
御役所江仙台御役人中ニ而送り状添
其外諸品船頭不残取上候而其段相改持参
候事ニ相成候

一我等彼国ニ而金銀其外黄物之類所持致候ハヽ
然上ハ彼地通用中金銀相渡其外衣類

道中小屋敷ニ而貰文ニ而所持ニ而通 ちゞみ

右之通相違不仕候以上

文化二年
丑四月

左平
津大夫
儀平
太十

ヨロシヤ方貰物左之通

○金銭八十○銀被時斗二ツ○日本仕立羅紗入二ツ
○襦袢二ツ○股引二ツ○帯二筋○上羊蘭帯大小七ツ
○革并木綿拾六○羅紗襦袢四 同羽織二ツ○
同股引七○ 縮単帯三筋 ○風呂敷三ツ○
木綿并麻襦袢十九○股引十○風呂敷八○麻蚊帳一
○毛織拾三○単帯十三筋○皷股引二○同羽織二ツ
○同合羽二ツ○メリヤス并木綿帽子○同股引五

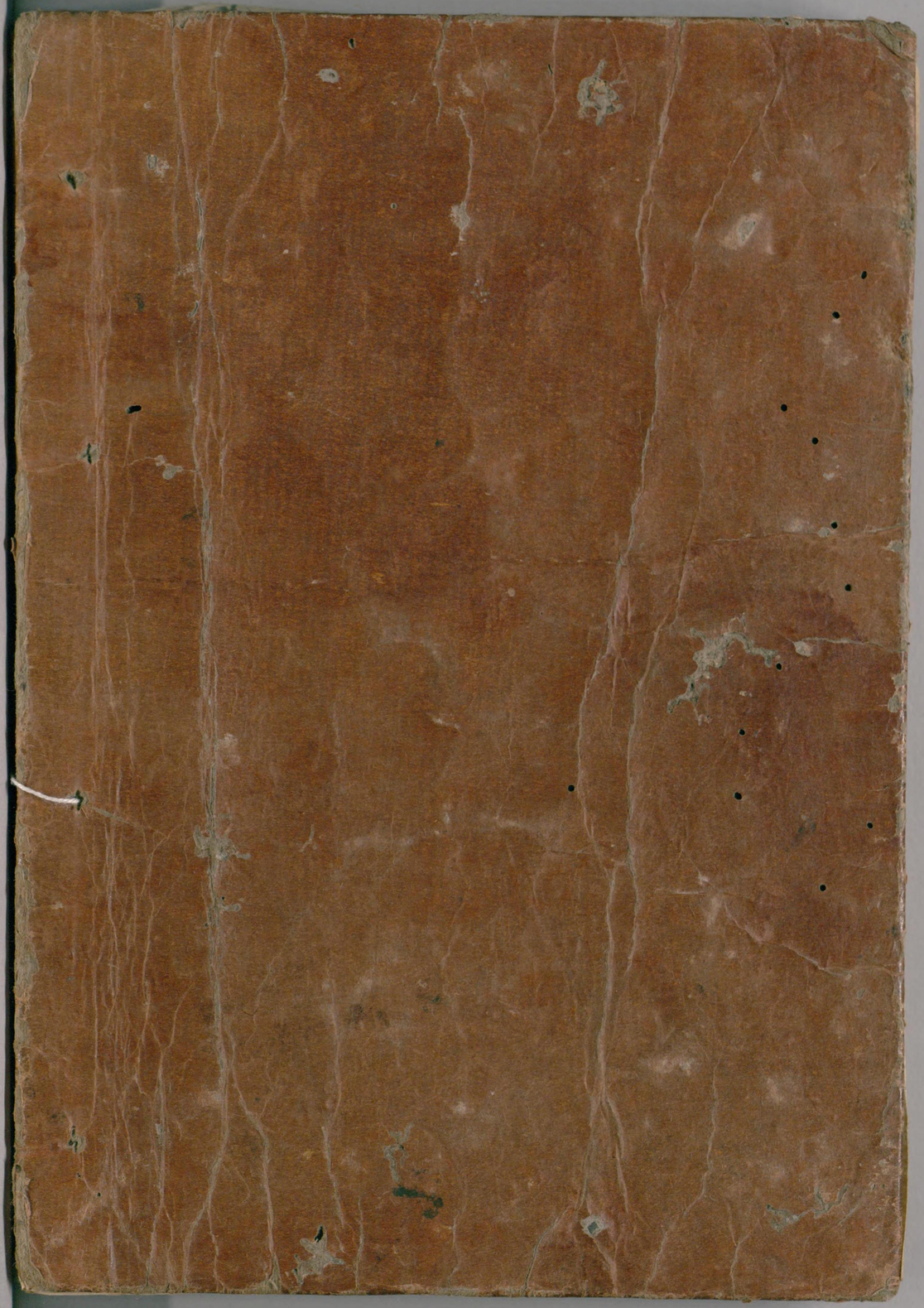
并襪廿四足○屋襪二足○同帽子二ツ○同
背又足○紙入四○手黄二○毛皮一枚○同袋ツ
○椰子水呑二○フラスコ〻○火打二ツ○液毛綿二反
○角根付二○椰一枚○鉄ホタン七ツ○紋 二下
○髮剃刀ハアカナモ本○髮剃刀箱一ツ○紙二本
○湯漬キヽツ○同七本○硝子瓶キヽツ○硝子窓ツ
○キセル三本○汁入一ツ○鏡二面○同鏡キヽツ○撰
文字本一冊

○世界品并舟〻當十三枚○麻坡油絵二枚

右天彼國滞留中稼海〻渉ヲ以買調或因
王之始知人分出〻貴文ハ不拘〻出来ハ

862
1

国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』 請求記号 862-1
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『魯西亜漂流記』 請求記号 862-1

ガラス使用